

波多利朗の Funky Goods

◎なかなか味がある逸品(?) ATARI Portfolioを取り巻く 怪しいグッズ達



イラスト: Ree(スタジオ・ぶ〜)

あけましておめでとうございます。とは言っても、この記事を書き進めている現在、年末進行の真っ最中なのであり、めでたくも何ともないのであるが。

12月の雑誌界は、毎年恒例の悪夢の年末進行とやらで、締め切りが10日近く早まってしまう。ただでさえ12月締めの仕事が増えているのに、このうえ記事原稿の締め切りまで繰り上がるのだから、書いてる側はたまったものではない。

先日も、編集部より「今月は年末進行なので、原稿作成のデッドラインは12月14日となりますのでよろしく」との、ありがたいメールをいただいた。メールの末尾には、「寒くなってきましたので、くれぐれもご自愛のほどを」と書かれていたのであるが、こう執筆をあおられては、ご自愛も何もあったものではないような気がする……。

というわけで、今回も元気にギークなテーマから入ってみよう。

メタ・エミュレータの世界

先月号の最後に、「柴隠上人稀瑠冥閣守(Kerberos)氏の Psion コレクション」と題して、氏が所有する17台にもおよぶ EPOC OS 系マシンのコレクションもご紹介する予定である。」とお伝えしたが、氏所有のマシンを撮影する時間がなかったため、これは次に持ち越すことにする。

なんせ、17台ものマシンを編集部を持ち込んで撮影するわけにもいかないし、第一、氏もこれだけのマシンをどこに保存してあるのか、すぐにはわからない状況になっていたためだ(まるで百舌鳥だな)。とにかく推定17台くらいはあることは確実なので、そのうち撮影させてもらうことになっている。

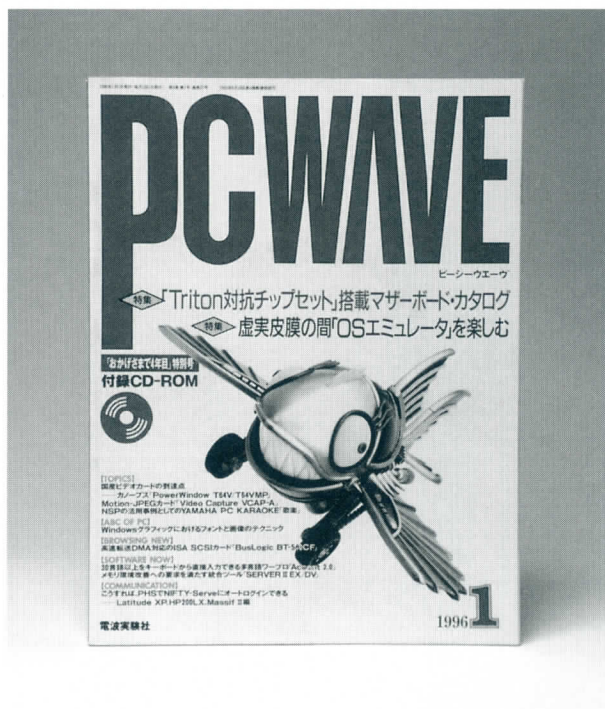


写真1
特集「虚実皮膜の間「OSエミュレータ」を楽しむ」が掲載された本誌1996年1月号

で、今回の前フリテーマは、メタ・エミュレータの世界についてである。筆者は、1996年1月号の本誌特集「虚実皮膜の間「OSエミュレータ」を楽しむ」において、「Psion Series 3/3aの『EPOC』OSをエミュレートする」という記事を書いたことがある(写真1)。

このとき紹介した Psion Series 3 用エミュレータを、今回はなんと Psion Series 5 とつい最近物故謎ば〜となった Geofox One 上にて動作させてみた。このようなわけのわからないことをやってみた経緯は、次のとおりである。

先月号において、EPOC32 上で PC/XT をエミュレートするというソフト「xtm」を紹介した。これを用いると、Psion Series 5 と Geofox One 上にて PC/XT 用ソフトウェアを動作させることが可能となる。

Psion Series 3 エミュレータは、CGA 画面を持つ PC/XT 互換機上で動作させる

ことが可能であるため、まず xtm を起動させておき、その中から Series 3 エミュレータを起動させることも可能となるはずだと。まさに、エミュレータの中でエミュレータが動作するといった「メタ・エミュレータの世界」。なかなかギークではないか。

さらに、Series 3 エミュレータ上で柴隠上人稀瑠冥閣守(Kerberos)氏が制作した「J3Edit」を起動させれば、日本語入力も可能になってしまうというオマケも付く。

で、さっそくやってみたのが写真2である。ここでは、Psion Series 5 上にて xtm を起動させ、その中で Psion Series 3 エミュレータを動作させている。

写真3は、Psion Series 3 用11ドット版テキストエディタ「J3Edit」を動作させ、日本語を入力しているところである。動作は遅いが、問題なく動いている。

写真4は、Geofox One 上にて Psion



写真2
Psion Series 5上でxtmを動作
させ、Psion Series 3エミュ
レータを起動させた

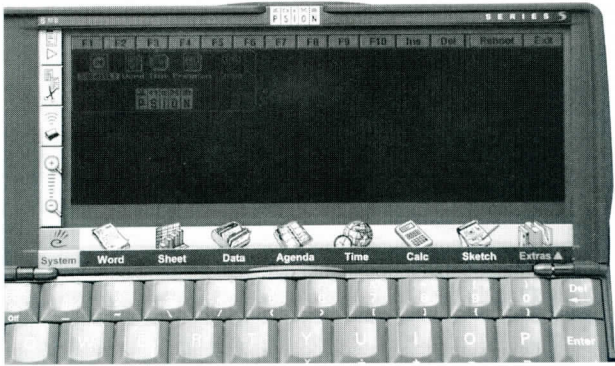


写真3
Psion Series 5上に動作して
いる Series 3用日本語エディ
タ J3Edi



写真4
Geofox One上でxtmを動作
させ、Psion Series 3エミュ
レータを起動させた

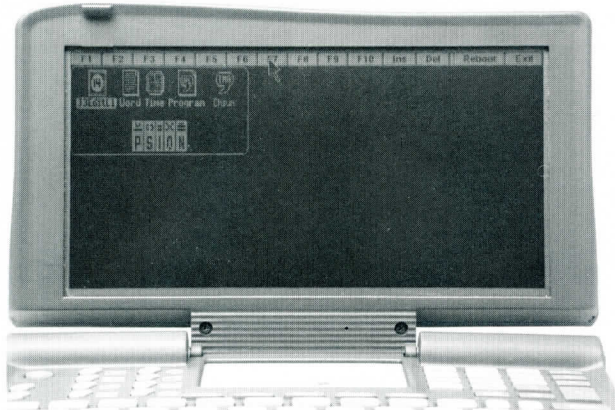
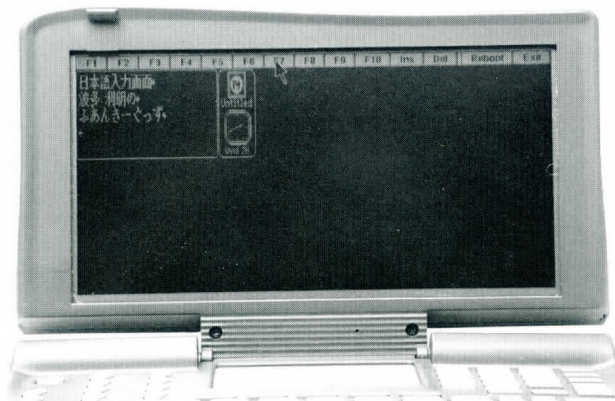


写真5
Geofox One上で動作してい
る Psion Series 3用日本語エ
ディタ J3Edit



Series 3 エミュレータを起動させたもの
である。また、写真5は日本語エディタ
「J3Edit」を動作させたときの同様のもの
だ。こちらも問題なく日本語が入力でき
た。いや、だから何なんだと言われると
辛いのであるが、まあ、こんなこともで
きたよということで…。

ちなみに、Psion Series 3aエミュレータ
はVGA画面を前提として作成されてい
るため、今回のような用途には使用でき
ない。Series 3 エミュレータのほうは
VGA、CGA、Heruclesの3種類のウイン
ドサーバをサポートしていたため、動作
させることが可能であったのだ。

なお、今回使用した Psion Series 3 エ
ミュレータは、96年1月に CompuServe
の Palmtop A Forum(go palma)から入手し
たS3EMUL.ZIPを用いている。その後、こ
のエミュレータがバージョンアップされ
たかどうかは、確認していない。

Portfolio に Type I カードを 装着する PCMCIA-Adaptor

さて、冗談はこれくらいにして、本題
に入ることにしよう。

以前紹介した Portfolio に ZIP ドライブ
を接続するための PoFo-ZIP ドライバも、
かなり怪しい製品だったが、Portfolio の
周辺には、まだまだ変な商品が多く取り
巻いている。

Portfolio は、特にヨーロッパでの人気
が高い。常に最新・最高速の製品に飛び
ついてばかりいるわれわれ極東の人民か
らすれば、いまだにこのような古い製品
が使用されているという事実に、若干不
思議な感じを覚える方も多いのではな
らうか。

しかしよく考えてみると「使えるもの
は末永く使う」という姿勢は立派なもの
であり、使い捨て文化に浸っているわれ
われにとっては見習うべきものがあるよ
うにも思える。

いずれにしても、限られたリソースの
中でその機能を十二分に発揮させるよう
な使い方をしていれば、当然マシンにも
愛着が湧いてくるのではなからうか。そ
んなわけで筆者は、最速・高機能の Win
dows CE マシンよりは、こういった古い
マシンをいじくるほうが好きなのである。

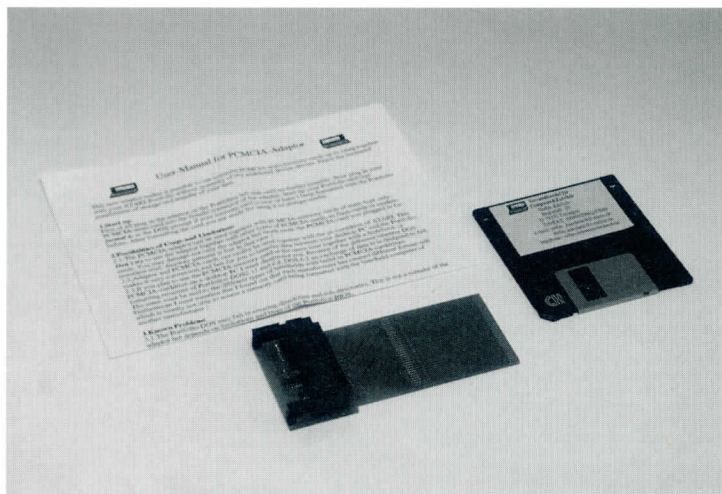


写真6 PCMCIA-Adaptorのパッケージ内容。ビニール袋にアダプタ本体とフロッピーおよびマニュアルが突っ込まれている



写真8 Portfolio本体カードスロットにPCMCIA-Adaptorを接続したところ。かなり出っ張る

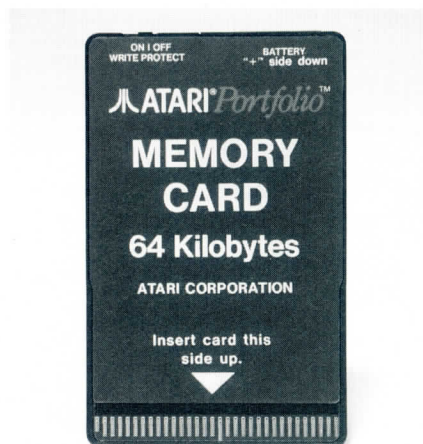


写真7 ATARI Portfolio専用の64KBメモリカード。PCMCIA SRAM Cardと異なり特殊形状をしている

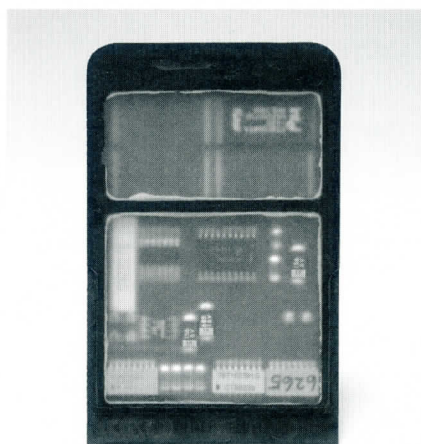


写真9 Portfolio専用1MBフラッシュメモリカード。なんとスケルトン構造の手造り品で！カードの中身が見える



写真10 実験に使用したSHARP製の512KB SRAMカード CE-301R。カナダより購入したSHARP PC3000のカードスロットに入っていたもの

さて、Portfolio用の怪しいグッズを2点ご紹介しよう。最初は、PortfolioのメモリカードスロットにPCMCIA Type I SRAMカードを装着するためのPCMCIA-Adaptorである(写真6)。

ご存じのとおり、ATARI Portfolioのメモリカードスロットは特殊仕様となっているため、汎用のPCMCIAカード類を使用できない(写真7)。そこで考案されたのが、このPCMCIA-Adaptorである。このアダプタを使えば、一般に販売されている容量1MBまでのPCMCIA Type I SRAMカードを、ストレージデバイスとしてPortfolio上で利用できる。

使い方は簡単で、PCMCIA Type I SRAMカードをアダプタに装着し、次いでアダプタをPortfolioのカードスロット

に挿入するだけでよい(写真8)。あとはPortfolioの電源を入れれば、SRAMカードはAドライブとして認識される。

そこで「format a:」と入力し、Portfolio上でSRAMカードをフォーマットしてやれば使用できる。余計なドライバソフトを導入する必要がないため、きわめて簡単にインストールできるのがこのアダプタの特徴なのである。

ただし、SRAMカードはPortfolio上でしか利用できないので、他のノートパソコンとデータを共有するような器用な真似はできない。あくまで、Portfolio上での閉じた世界での使用となる。

まあしかし、内部メモリ容量が128KBしかないPortfolioにとって、1MBのストレージメモリを増設できるのはありがた



写真11 まるで試作品のようなPCMCIA-Adaptor本体



い。1MBのPCMCIA Type I SRAM カードはたしかに高価であるが、Portfolio 専用の手造り・スケルトン構造の1MB フラッシュメモリカードよりは安上がりである(写真9)。

今回は、以前購入した SHARP PC3000 に付属していた SHARP 製 512KB SRAM カード(CE-301R)を使用してみたが、まったく問題なく認識した(写真10)。

さてこのアダプタであるが、作りはかなりぞんざいで、まるで試作品か何かのようだ(写真11)。構造は思ったより単純で、PCMCIAカードコネクタと若干のロジック IC しか使用していない。

ちなみに、使用しているロジック IC は、HC574、HC30、HC32、HC27×2の計5個のみである。使用できるカードは、PCMCIA Type I SRAM カードに限定されており、マニュアルには「決してモデムカードやフラッシュメモリカードを使用するなどといった妙な気を起こすな」と書かれている。

この製品は、Palm-ZIP や PoFO-ZIP と同様に、ドイツの Stefan Kaechele 氏から購入した。なかなか味のある製品といえるだろう。

Portfolio内蔵メモリのデータをバックアップする Port-Walk

次は、Portfolio 内蔵メモリのデータをウォークマンやカセットテープにバックアップするグッズ「Port-Walk」である。

筆者がパソコンをやりはじめたころ、当然 FDD などは非常に高価なデバイスであったため、パソコン本体には付いていないのが普通であった。そういったマシンでは、打ち込んだ BASIC や機械語プログラムを、カセットインターフェイスを介してテープレコーダーに保存したものである。

Port-Walk は、それと同じことを ATARI Portfolio 上で実現するためのものである。パッケージには、Portfolio とカセットテープとを接続するための専用ケーブルと、データバックアップ・リストア用ソフトウェアが格納されたフロッピーが入っている(写真12)。

まず、Portfolio Bus に Smart Parallel Interface(Model HPC-101)を装着し、そこ



写真12
Port-Walkパッケージ内容。
ソフトを格納したフロッピー、マニュアルがおなじみのビニール袋に突っ込まれている



写真13
Portfolio 本体に Smart Parallel Interfaceを装着し、Port-Walkを接続する

へ Port-Walk を接続する。次に、Port-Walk のミニピンプラグをカセットテープレコーダーのマイク端子もしくはヘッドフォン端子に挿入する(写真13)。

Portfolio の内蔵メモリに、フロッピーに格納されている ST.COM と LT.COM の2個のソフトウェアをコピーすれば、セットアップは終了だ。ST.COM は Portfolio の内蔵データをテープにバックアップするためのソフトで、LT.COM はリストア用のソフトである。

バックアップを行う場合には、Port-Walk をカセットのマイク入力端子に接続した後、DOSのコマンドプロンプトから「st [option] (filename)」と打ち込めばよい。

また、データをリストアするときには Port-Walk をカセットのヘッドフォン出力端子に接続した後、DOSのコマンドプロンプトから「lt [option] (filename)」と入力する。



写真14 カールコードが怪しい雰囲気を醸し出している Port-Walk 本体

Port-Walk のデータ転送速度は、600～2400 ボーの間を10段階で変更可能だ(写真14)。

この製品も、ドイツの Stefan Kaechele 氏から購入した。その昔、PC-8001 で打ち込んだゲームソフトをカセットに保存したことを思い出すような逸品である。